

未来進行形の語法

加 島 康 司

1. 英語には未来時の出来事に対する表現形式が、現在時や過去時のそれに対する表現に比べ、かなり多く存在する。それは、現在や過去と異なり、未来の場合はまだ出来事がおこっていないということが最大の理由であるが、それ故に、未来の出来事に対して自信をもって発言するのか、疑問視しながら発言するのか、それを現在と結びつけて発言するのか、現在と切り離して発言するのかなど未来の出来事に対し多様な捉え方をすることができる。そして、そのことが表現形式の多さに反映されている。

日本語は英語に比べ、未来表現が少ないため、数多い英語の未来表現の一つ一つのニュアンスの違いを訳出することが難しい。例えば、Leech (1987) は、未来表現のもっとも重要なものとして次の5つの方法を挙げている¹⁾。

- (1) *Will/shall*+Infinitive : The parcel will arrive tomorrow.
《小包はあす届くでしょう》
- (2) *Be going to*+Infinitive : The parcel is going to arrive tomorrow.《小包はあす届きます》
- (3) Present Progressive : The parcel is arriving tomorrow.《小包はあす届きます》
- (4) Simple Present : The parcel arrives tomorrow.《小包はあす届きます》
- (5) *Will/shall*+Progressive Infinitive : The parcel will be arriving tomorrow.《小包はあす届くでしょう》

上の5つの例文は未来における同一の出来事を述べているのだが、その出来事に対する発話者の考え方が異なっているのである。文＝「命題＋ α 」とすると²⁾、以下のように同一性と相違点は表示できる。〔 〕内が命題を示す：

(1') = <It will be, tomorrow, [the parcel arrives]>.

(2') = <It is going to be, tomorrow, [the parcel arrives]>.

(3') = <It is being, tomorrow, [the parcel arrives]>.

(4') = <It is, tomorrow, [the parcel arrives]>.

(5') = <It will/shall be being, tomorrow, [the parcel arrives]>.

例文(1)～(5)はそれぞれ特有の意味のニュアンスを持ち、交換が不可能であるとリーチは述べている³⁾。それは命題の部分が共通であっても、 α の部分が異なっているからである。一方、日本語訳を読むと分かるが、《小包はあす届くでしょう》《小包はあす届きます》の2つの表現しか与えられていない。日本語で5通りに訳し分けることは難しいという現実があるが、2通りの訳だけでは、英文の微妙な意味の違いが理解できないのである。従って、英語を母国語としない者にとっては、訳文としては仮に2通りしかできないとしても、 α の部分の違い、すなわち、ニュアンスの違いはきちんとおさえておく必要がある。

2. Leech (1987) は、重要度の順に、前節で列挙した5つの未来表現を以下のように並べている⁴⁾：

- ① *will/shall* + Infinitive
- ② *be going to* + Infinitive
- ③ Present Progressive
- ④ *will/shall* + Progressive Infinitive
- ⑤ Simple Present

この場合、重要度の順というのは、「使用頻度」の順と考えてよい。未来の出来事に対する「確実性」という点からすると、この順序は変わってくるが、まず、⑤単純現在、未来の出来事を「現在」と強く結びつけて考えるか、それを「現在として捉える」ということであるから、完璧に起こり得ると考えられる予定とかに対してしか使われない。例えば、*Tomorrow is Tuesday.* のような暦上の表現がその典型であるが、その他に、*I leave for Tokyo tonight.* という場合、他の表現の場合と違い、今夜の出発は今現在、確実なこととして決まっており、計画に変更の余地はないと言い切っているのである。未来の出来事に対してそれほどの自信をもって断言できることはあまり多くないので、重要度（＝頻度）の点で最後にきているのである。

①～③の構文の用法は比較的定義がしやすく、かつ、理解しやすいのでここで言及することはしない。④の *will/shall* + 進行不定詞〔以下、この形式を「未来進行形」と呼ぶ〕のもつ意味は理解が困難である。例えば、Jespersenは、*after-future*（後未来）の説明の中で、未来進行形の例文を用い、次のように述べている⁵⁾：

This has chiefly a theoretic interest, and I doubt very much whether forms like *I shall be going to write* (which implies nearness in time to the chief future time) or *scripturus ero* are of very frequent occurrence.

「これに関する興味は主として理論的なものであるが、*I shall be going to write.* (私は書こうとしているだろう)〔これは基本的な未来時から時間的近さを意味している〕またはラテン語 *scripturus ero* のごとき形式が、果たして非常にしばしば用いられるものであるかどうか、私は大いに疑問に思う。」

このJespersenの説明では、未来進行形の用法の一部（未来における継続中の動作）が述べられているだけであり、これで未来進行形を用いている

全ての英文の説明ができるわけではない。また、この形式があまり使用されないというのも果たしてその通りであろうか⁶⁾

また、以下の2文の違いはどこにあるのだろうか：

(6) I will leave for America next week.

(7) I will be leaving for America next week.

(7)の下線部を「～しているだろう」と、未来形と進行形がミックスしたような訳をしても、(6)と(7)の本質的な違いの説明にはならないであろう。次節において、未来進行形の用法を個々に取り上げて、考察してみたいと思う。

3.1. 「未来における継続中の動作」

この用法が最も基本的なものである。現在進行形は現在時における未完了の動作を表すが、その概念をそのまま未来の一定時に移行したのがこの用法である。Sweet (1898) は、以下のように現在進行形の例文(8)を挙げて、そこから(9)で未来進行形の用法を類推させようとしている⁷⁾：

(8) He is not at home : he is travelling about on the Continent.

(9) I shall not be at home next summer : I shall be travelling about on the Continent.

(10) When you reach the end of the bridge, I'll be waiting there to show you the way.⁸⁾

(10)では、従属節が表している内容、つまり、橋への到着時間が基準時になっており、その時間に焦点を合わせた未来の継続的行為が述べられている。

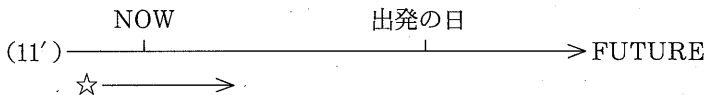
Keen & Matsunami (1969) はこの用法〔Jespersen の用語を使うと after-future〕を次のように具体的に説明している⁹⁾。二人は進行相を

process form と呼び、現在進行形と未来進行形の違いはそのプロセスの置き場所の違いであるとしている。例えば：

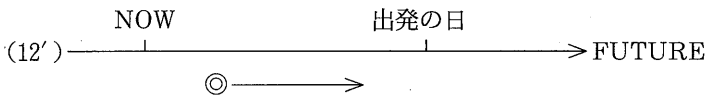
(11) I'm leaving for America next month.

(12) I'll be leaving for America next month.

(11)の場合、私は渡米の準備というプロセスの中に現在いる。つまり、チケットの購入、荷物の発送、知人への別れの挨拶などを現在しているという含みがある。一方、(12)は、プロセスが未来にセットされている。目下のところ、チケットの購入、等をしているわけではない。来週からでも、行動を始めるだろうという含みとなる。両者の違いを図示すると次のようになる：



(11')では、☆印が動作の始まった時を示し、現在、既に出発準備を始めていることを示す。



(12)の場合、文中で基準時が明示されているわけではないが、(12')の◎印は、例えば、来週あたりにという時間が心の中でセットされていることを理解する必要がある。

この用法は、比較的よく使用される。以下、例文を列举し、解説を加えたい¹⁰⁾。

(13) Then I'm going to make up a list of books for you, long

enough to take years to get through. You'll be reading it long after I don't see you anymore. [*Evergreen*, 35]

- (14) So that's what you'll be doing from now on. [*Evergreen*, 79]

- (15) Where will you be staying in Paris? [*Bread*, 345]

この用例では基準が表れていないが、会話の相手が翌日からフランスへ行くことになっている。

- (16) By the time he or she is grown I suppose my grandson or granddaughter will be walking through abandoned and burnt-out cities where automobiles will be strewn around everywhere, without fuel and immobilized on last voyages. [*Bread*, 476]

- (17) I'll be waitin' for you in the morning, Howard. [*Picnic*, 91]

- (18) I'll be waiting right here when the movie gets out. [*RD*, Apr., 64]

次の(19)、(20)は、過去から見た未来の出来事について述べている。未来進行形の形式をとっていないが、(12')で示した現在と未来の動作の関係は、そのまま過去に移行した形で維持されている。

- (19) I couldn't stop thinking about the financial strain she would be facing. [*RD*, Oct., 99]

彼女が将来直面しているだろう経済的負担について私はその時どうしても考えないわけにはゆかなかった。

- (20) Was it conceivable that a man who had dictated the fate of millions from a mansion would be living in this colorless little place? [*RD*, Jun., 128]

豪邸から何百万人もの人間の運命を指図した男が将来こんな味気のないさやかな家に住んでいるなんて、あの時、考えられ

ただろうか。

3.2. 「当然の未来」

まず、未来進行形の特殊な用法として、FUTURE-AS-A-MATTER-OF-COURSE（「当然の未来」）と呼ばれる用法が挙げられる。¹¹⁾

これは、未来の出来事が文の主語や発話者の意志によって起こるのではなく、「当然のこと、自然のなりゆき」として起こるということを表す用法である。例えば：

(21) I'll drive into London next week.

(22) I'll be driving into London next week.¹²⁾

(21)の場合、ロンドンへ車で行くという主語(この場合、＝話者でもある)の意志・決心を表しているが、(22)の場合、意志というよりは、むしろ、当然のこととしてロンドンへ行くことになるだろう、と解釈される。

(23) We'll fly at 30 000 feet.

(24) We'll be flying at 30 000 feet.¹³⁾

同様に、(23)の場合、パイロットがそのフライトでは30,000フィートという高度で飛ぶことを決定したことを発言しているのに対し、(24)の場合、30,000フィートで飛ぶことが当然のこと、つまり、通常の高度であるということを示している。

言い方を変えると、未来進行形は法助動詞willの持つ意志性を排除した、純粋な未来を表すことを目的とした用法ともいえる。¹³⁾

更に、未来の出来事を自然のなりゆきとして、当然のこととして起こると捉えることから、未来進行形は、「計画ないし予定された未来の出来事」を表すことがあり、その場合、計画や予定がされているがゆえに、それに関連した含意が生じる。次の例文では矢印の右側が含意である：

(25) I'll be seeing Bob this morning.

《今夜ボブに会うことにしている→だから、なにか伝えることが
ありますか》

(26) We'll be having supper in about twenty minutes.¹⁵⁾

《あと20分で夕食だ→だから、外に出かけないで》

未来の出来事が当然のこととして、または、計画の一部として起こるとい
うことが、「丁寧さ」につながることがある。Swan (1980) は、次の例文
で、未来の出来事が計画としてすでに決まっていることを示そうとしたの
であるが、同時に、合意された丁寧さをうまく表すことにもなっている¹⁶⁾：

(27) 'Shall I pick up your shopping for you?' 'Oh, I couldn't
possibly trouble you.' 'It's all right, I'll be going past
the shops anyway.'

(12), (12')で、現在と未来の出来事の関係について説明した。一般的に、
出来事というものは現在から未来へ移すことによって、現実感が薄れてゆ
く。それだけ、場合によっては、表現が婉曲的になることがある。更に、
(27)の下線部は、あなたのためにわざわざ店のほうを通るのではなく、最
初からそちらの方へ行く予定になっていたから気にしなくてもよい、とい
うニュアンスとなり、押しつけがましさがなくなる。相手に対する負担が
軽減するぶんだけ一層丁寧な表現になる。

以下、収集した用例で具体的に検討したい。それぞれの下線部の動作は、
主語の意志による行為というより、そういうことになっているという予定
を示す：

(28) As a matter of fact, his son will be coming through here
this spring to buy fox skins. [Evergreen, 23]

ちょうど、息子が来ることになっている。

- (29) Company tonight, you know. My niece Agnes will be coming to help. [*Evergreen*, 64]

アグネスが手伝いに来てくれることになっている。

- (30) When will we be arriving off the coast of Florida?" [*Memories*, 263]

このままでゆくと到着はいつ頃になるのだろうか。

- (31) "Good. I'm very pleased to hear that. I'm sending a delegation of our company executives to London to study our operation there. I would appreciate it if you would take them in hand and look after them." "I'll be happy to. When will they be arriving?" [*Memories*, 283]

いつ頃到着することになっているのだろうか。

- (32) At the end of the evening, as the men were leaving, Demiris said, "You'll be flying to London early in the morning. ... [*Memories*, 284]

早朝、ロンドンへ飛行機で発つことになっている。

- (33) I'll be coming to London in a few weeks. [*Memories*, 110]

2～3週間後にロンドンへ行くことになっている。

- (34) They have a big turnover in the faculty, people drifting in and out, like the wandering teachers of the Middle Ages. He'll be getting in touch with you. [*Bread*, 463]

(話はつけておいたから,) 当然、彼の方から連絡してくることになる。

3.3. 「近い未来」

近い未来、遠い未来という時、その近さ、遠さに客観的基準があるわけではない。それをどう捉えるかは話者の主観にかかっている。しかし、Jespersen (1931) による、未来を表す3つの動詞形〔未来形、現在進行

形, 未来進行形) の比較は, 未来進行形が持つ1つの用法を理解する上で参考になる。彼は次のように説明している¹⁷⁾:

… : *people will come* speaks only vaguely of the future ; *people are coming* speaks of the immediate future ; but *people will be coming* as in Stevenson M 291 refers to the coming as near, though not exactly immediate;…

要約すると, 未来形は漠然とした未来の出来事, 現在進行形は目前の未来の出来事, 未来進行形は近い未来だが目前というわけではない出来事, を表すということになる。そして, 次のような未来進行形の例文をあげている :

- (35) I believe [sic] …he [sic] will be coming this way.
 (36) I shall be going in a moment.
 (37) When shall you be going? To-morrow [sic].
 (38) My children are at school, and they'll be coming home.

ただし, (36)が示すように, そして, *Leech* (1987)も述べているように,¹⁸⁾ 未来進行形が非常に近い未来の出来事を表す用例はけっこう見つかる。

- (39) Well, I'll be getting along to do the supper. [*He*, 26]
 それじゃ, 夕食の用意があるので帰ることにするわ。
 (40) I'll be going now. [*Bread*, 333]
 じゃ, 帰りましょう。
 (41) Is there anything more you'll be wanting tonight, Mr. Strand? [*Bread*, 457]
 ストランドさん, 今夜必要なものがもっとありますか。
 (42) Will you be needing a blood sample today? [*RD*, Apr.,

血液のサンプルは今日必要ですか。

(43) We'll be taking off in just a few minutes. [*Memories*, 63]

すぐに離陸する。

(44) This place will be swarming with VB and STB in a matter of minutes. [*Crossfire*, 289]

すぐにVB (プラハ市警) やSTB (チェコ国家機密保全局) でいっぱいになる。

3.4. 「見込み／推量」

Palmer (1979) は、進行形はwillの未来用法 (futurity use) と認識用法 (epistemic use) を区別する仕組み (device) であると指摘している。¹⁹⁾ 例えば:

(45) John will come tomorrow.

(46) John will be coming tomorrow.

(45)の場合、willの意味が複数にとれ曖昧であるが、(46)の場合は3.2.で述べた通り、未来進行形を使うことで、「意志」の意味を排除している。更に、この場合、認識的用法の解釈、つまり命題に対する話者のコメントとして解釈するのが普通であると述べている。また、未来進行形という名称にもかかわらず、この用法は、「現在」の動作に対する話者の推量を表すためにも使用されることに注意する必要がある。

(47) Well, it's getting late. I guess your wife will be wondering where you are. [*Memories*, 204]

奥さんは今頃君がどこにいるのかなんて思っているんじゃないか。

(48) Wim, what about Catherine Alexander? ...Wim? Oh, her.

She won't be working there anymore. [*Memories*, 362]

ウィム、キャサリン アレグザンダーはどうなんだい、ウィム。
ああ、彼女か。彼女はもう今はそこで働いていないだろう。

- (49) If their parents' marriage is definitely on the rocks, then children will be dealing with the threatening possibility of divorce whether or not their parents talk about it. [*Road*, 19]

もし、両親の結婚生活がはっきり破綻をきたしているのなら、
そんな時、子供達は心の中で、親が口に出そうか出すまいが、
離婚という自分を脅かす可能性を相手にしているのだろう。

- (50) Okay. Later on, you may have to describe the wound. But we won't be needing you anymore tonight. [*Bread*, 328]

分かりました。それじゃ後で怪我の具合を説明してもらうこと
になるかも知れません。今夜はもういいでしょう。

3.5. 「誇張／アイロニー／冗談」

3.2. で未来進行形は、「出来事が当然のこと、自然のなりゆきとして起こる」ことを描写すると述べたが、その為、異常な、突然の行為の描写には向かない。これが未来進行形の無標な面であるとする、一方、敢えて異常な、突然の行為に対してこの構文を用いた時、その行為を当然のこととみなすこととなり、そこから、未来進行形の有標的な意味として、滑稽さ、誇張、皮肉が生まれることになる²⁰⁾ Jespersen (1931) は、感情的色彩を持つ用例として、以下の文をあげている²¹⁾。

- (51) You'll be asking whether you must knock at my door, next.
次には、私のドアをノックしなければならないか尋ねるのだろう。

- (52) I'll be forgetting my own name next.
次には、自分の名前すら忘れてしまうのだろう。

(53) You'll be telling me next that I'm mad.

私の気が狂っていると次には言いだすのだろう。

上の例文のそれぞれに、nextという語があるのに注意されたい。そのため皮肉、誇張、滑稽の意味合いが取り易い。

しかし、収集した用例の中で、この用法に相当するものは1例しか見出せなかった。

(54) CORA. Rubin, Mrs. Stanford paid Sonny five dollars this afternoon for speaking a piece at her tea party.

RUBIN. I'll be damned. He'll be makin' more money than his Old Man. [*Dark*, 129]

コーラ：ルービン、スタンフォード夫人がね、今日の午後ソニーが茶会で詩を暗唱したので、5ドルくれたのよ。

ルービン：いや、まいった。あいつは親父より金を稼ぐよ。

3.6. 文体上の問題

最後に、未来形と未来進行形の間に意味上の違いが殆どない場合があることを指摘しておきたい。単純未来形で使われている助動詞 will は、意味の一つとして、主語の意志を表すと考えられる。未来進行形は、その点を排除した、いわば純粹な未来を表すための構文と考えることができる。「意志」は人間特有のものであるが、例文(55)、(56)の主語はともに人間ではない。従って、このような場合、単純未来形か未来進行形かの選択は、「意志性」の有無という意味上の問題というよりは、文体の問題となってくる。

(55) a. The next train to London will arrive at platform four.

b. The next train to London will be arriving at platform four.²²⁾

(56) a. The sun will set in a minute.

b. The sun will be setting in a munute.²³⁾

それぞれ、b.のほうが、くだけた (informal) 文体となる²⁴⁾

(57) Initially they were wary of the odd craft and its desperate-looking passengers. But it would soon be getting dark.
[RD, Jan., 140]

最初、彼らは奇妙な形をした船と絶望的な顔をした乗組員たちに対して用心していた。しかし、すぐに暗くなるだろう。

4. 未来を表す表現の一つ一つが独自のニュアンスを持ち、また、文体上の問題もあるために、それらは交換不可能であるということであった。収集した用例のなかで、「未来における継続中の動作」「当然の未来」「近い未来」「見込み／推量」と解釈するのが妥当と思われるものが殆どで、「誇張／アイロニー／冗談」を表すと解釈されるものは1例しかなかった。

これまで述べてきたように、未来進行形の用法は多様なのだが、未来形＋進行形という構文を持つからといって、すべての用例を「～しているであろう」と未来の継続的状态だけに訳してしまてはいけない。

ある未来進行形がどの用法として使われているかを知るには、文脈にその文を置いて考えるしかない。しかし、いくら前後関係から判断しようとしても、現実にはどの用法で使われているのか断定できかねる場合や、複数の用法に解釈される場合も多かった。例えば、例文(43) We'll be taking off in just a few minues. は、「近い未来」を表す用例として挙げたが、それはin just few minues という副詞句があり、時間的なものに重点を置いて解釈したためである。しかし、この文はパイロットから乗客への発言なので、パイロットの意志とは無関係に出発時刻はあらかじめ決まっていて、このままでゆくと2～3分で出発だという意味にもとれ、その場合、この未来進行形は「当然の未来」を表す用法であると解釈するのが妥当かも知れない。

注

- 1) G. N. Leech, *Meaning and the English Verb* (London : Longman, 1987²) 56.
ただし、(1) ~ (5) の日本語訳は國廣哲彌訳注『意味と英語動詞』(東京 : 大修館書店, 1976年) を利用した。なお、日本語訳は初版 (1971) を訳したものの。
- 2) 毛利可信『英語の語用論』(東京 : 大修館書店, 1980年) 65.
- 3) Leech 56. ただし, D. Keen and T. Matsunamiは, *Problems in English* (東京 : 研究社, 1969年) 52頁で動詞形 (1) ~ (5) のニュアンスの違いを説明した後、次のように述べている :
These are all implications, and often ones that the speaker is not fully conscious of. And sometimes the implications matter and sometimes they don't. In the examples given I don't think the implications matter very much, although in a particular situation they might well do so.
- 4) Leech 70.
- 5) O. Jespersen, *The Philosophy of Grammar* (London : George Allen & Unwin, 1924) 263. 日本語訳は半田一郎訳『文法の原理』(東京 : 岩波書店, 1958年) を利用した。
- 6) もっとも、イエスペルセンは、*A Modern English Grammar Part IV*の中では未来進行形を詳解している。
- 7) Henry Sweet, *A New English Grammar Logical and Historical Part II* (Oxford : Oxford University Press) 105.
- 8) S. Greenbaum and R. Quirk, *A Student's Grammar of the English Language* (London : Longman, 1990) 58.
- 9) Keen and Matsunami 51-52.
- 10) 例文について : ①出典は例文の後に略称を用いて示してある。〔 〕内の最初が作品名、続く数字が頁を示す。作品のフルネームは参考文献一覧を参照せよ。
②下線はすべて筆者が施したものである。③必要と思われる部分にだけ日本語訳をつけている。
- 11) Leech 68.
- 12) Leech 68.
- 13) R. Quirk, S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik, *A Comprehensive Grammar of the English Language* (London: Longman, 1985) 216.
- 14) ただし, Jespersen, *A Modern English Grammar Part IV* (London : George Allen and Unwin, 1931) 204. では、未来進行形のwillが意志 (volition) を表す場合があることを以下の例文をあげて指摘している : Sh Ado I. 1. 117 I wonder that you will still be talking | Walpole ST 116 Will you be having some tea, sir? もっとも、Walpoleの例は方言的かもしれないとしている。

- 15) A. S. Hornby, *Guide to Patterns and Usage in English*(London : Oxford University Press, 1974²) 207.
- 16) M. Swan, *Practical English Usage*(Oxford : Oxford University Press, 1980) 257.
- 17) O. Jespersen, *A Modern English Grammar on Historical Principles Part IV* (London : George Allen&Unwin, 1931) 202.
- 18) Leech 69.
- 19) F. R. Palmer, *Modality and the English Modals* (London : Longman, 1979) 119.
- 20) Leech 69.
- 21) Jespersen, *A Modern English Grammar, Part IV*, 203.
- 22) Quirk et al., 217.
- 23) Leech 69.
- 24) Quirk et al., 217.

参考文献

- 安藤貞雄『英語教師の文法研究』東京：大修館書店，1983年
 浅川照夫 鎌田精三郎 『助動詞』新英文法選書4（太田朗・梶木優編） 東京：大修館書店，1986年
 Greenbaum S. and R. Quirk, *A Student's Grammar of the English Language*. London : Longman, 1990.
 Hornby, A. S. *Guide to Patterns and Usage in English*. London : Oxford University Press, 1974²
 Jespersen, O. *The Philosophy of Grammar*. London : George Allen & Unwin, 1924.
 半田一郎訳『文法の原理』東京：岩波書店，1958年
 …… *A Modern English Grammar on Historical Principles. Part IV* London : George Allen & Unwin, 1931.
 …… *Essentials of English Grammar*. London : George Allen&Unwin, 1933.
 Keen, D. and T. Matsunami, *Problems in English—An Approach to the Real Life of the Language*. Tokyo : Kenkyusha, 1969.
 小西友七 岸野英治『現代表現英文法』東京：英宝社，1988年
 Krusinga, E. *A Handbook of Present-Day English. Part II* Groningen : P. Noordhoff, 1933.
 Leech, G. N. *Meaning and the English Verb*. London : Longman, 1981².
 國廣哲彌訳注『意味と英語動詞』東京：大修館書店，1976年
 毛利可信『英語の語用論』東京：大修館書店，1980年
 大江三郎『動詞（I）』講座・学校英文法の基礎第4巻 東京：研究社，1982年

-
- Palmer, F. R. *Modality and the English Modals*. London : Longman, 1979.
- Poutsma, H. *A Grammar of Late Modern English. Part I*. Groningen : P. Noordhoff, 1928.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. *A Grammar of Contemporary English*. London : Longman, 1972.
- … *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London : Longman, 1985.
- Swan, M. *Practical English Usage*. Oxford : Oxford University Press, 1980.
- Sweet, H. *A New English Grammar Logical and Historical. Part II*. London : Oxford University Press, 1898.
- 安井稔『英文法総覧』東京 : 開拓社, 1982年

例文は以下の作品から引用した。〔 〕内は本文中で用いた略称。

- Inge, William. *Picnic*. Tokyo : Nan'undo, 1958. [Picnic]
- … *The Dark at the Top of the Stairs*. Tokyo : Kinseido, 1974. [Dark]
- Lessing, Doris. "He" in *Short Fiction 30-2nd Series-Charming British and American Stories*. Compiled by Kazushi Kuzumi. Macmillan Language House, 1972. [He]
- Peck, M. Scott. *The Road Less Traveled*. Tokyo : Kinseido, 1991. [Road]
- Plain, Belba. *Evergreen*. New York : Dell Publishing Co., Inc., 1978. [Evergreen]
- Pollock, J. C. *Crossfire*. New York : Dell Publishing Co., Inc., 1985. [Crossfire]
- Reader's Digest*. Asia Edition. October 1990~July 1991. [RD]
- Shaw, Irwin. *Bread Upon the Waters*. New York : Dell Publishing Co., Inc., 1981. [Bread]
- Sheldon, Sindney. *Memories of Midnight*. New York : Warner Books, Inc., 1990. [Memories]